木下利玄歌集

竹栢會版行

歌集

一路

大13-12月

聚集一路

市下利喜著

一路

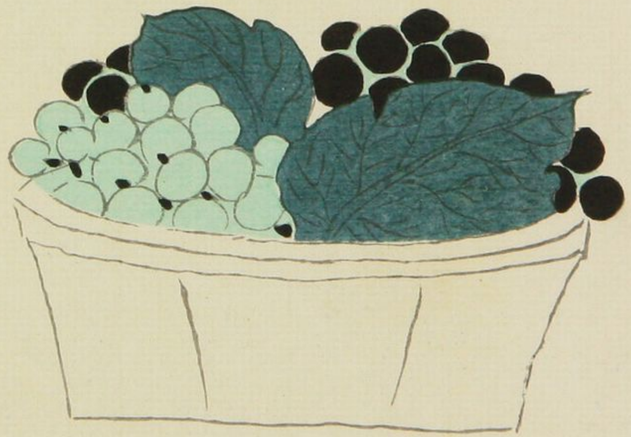
一路

木下利玄著

竹柏會

そんけい

的々紫
虎
含雨情



一四三
某
含長寿

いちろ

木下利玄著

一路

短歌三百五十八首

大正十三年版

東京　竹柏會發行

岸田劉生裝幀

長與善郎兄に捧ぐ

神のきよい宮ゐにまうづべく、長い一すぢ道を、一歩々々と足跡を土に印してゆく旅人の姿は、よそ目にはいかにも寂しげに見えるであらう。しかし敬虔な旅人の胸には、人しれぬなつかしさや嬉しさがあふれ、望がやどつてゐる。たとひ雨風にくるしみ、野原に行き暮れて、つらさ苦しさになやみ去をれても、また深いめぐみの感じによみがへつて、眞直にと進んでゆく。わが

木下君が、多年和歌の一路を進まれた心境には、おもふに、これにたぐふべきものがあらう。

木下君がはじめて竹柏園を訪はれたのは、明治三十一年、君が十三歳の秋であつた。自分は、學習院の制服すがたのうらわかい君にむかつて、君の祖先の木下長嘯子が、新しい歌を詠じたことを述べて、君が和歌の道に精進せられむことを慫慂した。爾來

君は、年久しくこの一路を歩みつづけて來られた。こたび君の第三の集が、わが竹柏會から、心の華叢書の一として刊行せらるるに際し、自分は、君の精進にむかつて、あつき歡喜の情と、ふかき尊敬の念とをここに披瀝して、君の前途を祝福する。

大正十三年十一月　　佐佐木信綱

目次

溪籟（二首）……一
洛北大原行（十三首）……三
出雲にて（十首）……一〇
日向へ（十一首）……一六
宵宮の燈籠（十六首）……二二

二三月雜詠（十七首）……三一
どん〳〵橋（七首）……四〇
東山法然院に詣る（四首）……四四
奈良晩春（三首）……四七
大和路（三首）……四九
葉櫻雨（十三首）……五一
葵祭の日（十二首）……五八

六甲越（十一首）……六五
童（八首）……七一
鷄（五首）……七六
殖林の杉（五首）……七九
太秦の牛祭（十三首）……八二
雪晴れ（八首）……八九
春動く（十首）……九四

春山一路（七首）……一〇〇
富士へ上る（四十六首）
岬（六首）……一〇四
觀音堂（五首）……一二八
大和の田舍（十二首）……一三二
大和國法起寺（十首）……一三五
晩秋（十首）……一四二
……一四八

大根畑（十首）……一五四
冬日（七首）……一六〇
春（八首）……一六四
牡丹と芥子（十一首）……一六九
雨後新樹（五首）……一七五
深夜汽笛（三首）……一七八
峡のみち（三首）……一八〇

夜道（二首）……一八二
冬來る（六首）……一八四
春光（四首）……一八七
思ひ出（五首）……一九〇
新綠（六首）……一九三
初秋（二首）……一九七
晚秋初冬（十二首）……一九九

大霜（四首）……二〇六
軍艦碇泊（三首）……二〇九

一

路

溪籟

日がな日ねもすたぎつ溪河夕されば
いよたかくとゞろけるかも

宵はやく月かくれたる峰くろみ山河の瀬
の高鳴り渡る

洛北大原行

晩秋の一日思ひ立ちて、京都より大原の奥を訪ぬ

おし默る一人の歩み晝たけて八瀬大橋を
渡りけるかも

先づ三千院へ

大原の三千院に行きつきて靴脱ぎたれば
汗ばみ冷えつ

小坊主の後より入りつ往生極楽院浄らに
つめたみ虔ましもよ

山の堂しゞまの深みに物言ひしあとの幽
けさ身を省みる

山もとづたひに寂光院へ

寂光院の床ふむにつべたみそゞろに見る
阿波の内侍のはりぼての像

お堂出づれば只今の間に日はかくれ雨の
粉ちれり大原の峽に

庵室の障子あけてみれば日はかげり又日
は照るも大原の峽に

庵室の障子に午后の日あかるく山の底冷
え膝に感ずる

庵室の障子あかるき午后にして茶を汲む
尼の頰の紅きこと

峡小田は大方苅られ大原山黄葉殘る木々を渡る風あり

女院の山のみさゝぎ夕照れり京都へのかへりをいそぎて拜す

歸るさ

月夜になり晝間あるきし三里のみちつゆけくあかるし俥にてかへる

月夜にゆく道のかたはらの槇林しめらにさやぎて又しづまりつ

出雲にて

十一月初美保關に遊ぶ、同行二人

美保の關にこの夜來り泊り月夜なり山下
海しきらゝかに照れり

漁師等が夜深く船を出す聲に眼覺めしこ
こは出雲美保の關

船つき場の石だゝみに出でて女の子ら日
暮を遊ぶも甲高にうたひ

あそびの輪一人はなれて泣く子あり夕風
寒きにあはれにきこゆ

岬うらの湊の街の狹苦しさしたしましも
よ時化て夜に入る

杵築なる友と、山越えして鰐淵寺に紅葉を見る

里遠く山に入り來て甍葺ける伽藍の屋根
仰ぎたふとき思ひす

瀧壺のめぐりに紅葉たゞよへり山かげ寒
さ身にこたへつゝ

眞上の紅葉の山ゆおち來る瀧のとばしり
のさむざむしかも

日暮友と別れてとある坊に宿る

山寺の緣の明るみになほねれば紅葉もか
ぐろみ暮れてゆくめり

よべとまり心おちゐし山寺の一室の朝の
時愛しみかも

日向へ

五月、一人汽船にて豐後より日向に入る

岬めぐれば人家かたまれりわが汽船荒磯
に沿ひて久しかりしが

岬かげにかたまる村へわが汽船とまり臨
みて汽笛を鳴らす

この湊晝餉どきならし海ゆ照る日に光り
てあり屋根も若葉も

船着き場と繫りし汽船と眞日の下にあひ
關れりこのかゝはりを

土々呂附近

朱欒蜜柑花盛りにて日向路は俥して行く
に風香に滿てり

こゝら一圓朱欒の木々の花ざかり空氣澱
もりとんろりにほふ

馬車すぎてあげし土ほこり路ばたの野薔
薇の花へなびきしづもる

宮崎に向ふ、凡卅里程なり

日向路の街道埃ぼこり馬車にて日ねもす南し南す

美々津川岸

神武天皇の御腰かけ岩あり天皇もつかれ給ひけむわれ等の如くに

神武天皇の御腰かけ岩は道ゆきてわれ等も休むたゞの岩なり

高鍋附近

馬車とまればとみにひそけしたそがれの野中のせゝらぎ何邊にか鳴り

宵宮の燈籠

奈良春日神社節分

吾嬬はもはぐれぬやうによりそへり宵宮詣での人出のなかに

大木のくろき梢にしきられて星の夜空のせばくしたしも

杉の木に丹塗末社の燈明のはだか灯うつりおほにまたゝく

雨後の宵宮の灯みちわるに粘む土さへに
くからなくに

灯あかりにわれらかたまり燈籠の奉納人
の名まへをよむも

春日山宵のともし火燈籠の障子にとろり
またたけり見ゆ

燈籠はとぼりそろへり廻廊の青丹匂ひて
宵のほどなる

廻廊の廂をひくみ灯あかりに丹ぬりの椽
數見ゆるかも

燈籠のいくつのあかりほのぼのと丹ぬり
柱の圓みあかるむ

をろがみて眼をあきにけり燈明の夜宮の
奥にいつくしきかも

燈籠にほのあかるめる石だゝみふみ〳〵
あゆみ宵宮をめぐる

春日山宮居のうらの幾あかりにほひしづ
もるさ夜のしめりに

吾がいなば宵宮の裏のしづもりにいつま
でとぼる灯なるらむ

いなまくは愛しみさびしみ燈籠の灯の下
をいゆきもとほる

物の隈くらがり退かず燈籠のあかりとろ
とろとぼりたるかも

灯あかりのほとほとと
大木の幹の太々とあり

二三月雑詠

風の日

なか空に大樹の梢さいなまれ嵐を堪ふる
うなりゆゝしも

地上にはしばらく絶ゆる風間にも大樹の
梢のうなりやまずも

右左地肌しめれる切通し風すさぶ日にと
ほらくよしも

街頭

牛車のつしり重み軋みゆくにつぶれてめ
りこむ道路の砂利音

埃たつ街をくれば堀割にたぶ〳〵ゆるゝ
あをにごり水

風埃り橋に吹き立ち日のくれの堀割水の
皺めるさむさ

日のくれの冬空映すお濠水風に皺めりさ
むけし寒けし

郊外

郊外にかへりて來ればしめり土足うらに
應へ心なごめり

ねむり得し淺きまどろみはやめざめ厨の
音のいち〳〵きこゆ

眞夜中の軒にかそけく音さする雨の降り
出を小床にきくも

外の面には物の濡れゆく音爲めり夜半の
小床にめざめてをれば

雪

夜のうちに雪降りつもり庭の面木々まろ
くたわみ奇にしづもる

晝の雪こもらふ部屋の障子の紙しめらに
鳴るをながめてゐるも

宵の雪かつとけてゐる樋の音つく〳〵き
けば彈みて鳴れり

春埃

砂埃より〳〵立てり往來の春日なゝめに
風そよぎいで

春嵐

場末町新立工場の板塀がなまあたゝかき
嵐にぬれたり

葛飾の春田の水にあたゝかき嵐渡りて小
浪よる見ゆ

どんぐ橋

下野國粟野

寒き日の街道を來て里川のどんぐ橋を
踏みわたりたり

くもり日の川淀くろく殖林の杉の木立の
うつりたるかも

松の木の切り倒されてあらはなる向うの
峰に對ひていこふも

川向うの秋葉山權現にこの夕幟立ち居り
祭あらしも

川向うの山の腹なる權現に太鼓をならす
夕靜み時

星空に夜の木の梢を仰ぎつゝ通り行きた
りその木のもとを

提灯にてらし出さるゝ夜の木の幹まもり
つゝ通りて行くも

東山法然院に詣る

訪なへる春山のみ寺庭きよみひつそり閑
として眞清水の音

金色の本尊に奉れるさくらの花春しんと
してはなやぐ御堂

み堂靜み畫間の蠟の灯現しきに山の眞清
水音かよひ來も

御佛のお前の板敷つめたきに散華の椿の
紅白映れる

奈良晩春

春日野の瑠璃空の下杉が枝にむらさき妙
なり藤の垂り花

薄雲に春日はかくれ杉が枝に色こまやか
なる藤のむらさき

老杉にかゝる藤浪百花の匂ひにほへり
風なき春日

大和路

雑木山松蟬なけり麓のみち日照りをつよ
み疲るゝはやし

若葉せるみさゝぎ山に歩きくればじりじり日照りに松蟬なけり

大和路は田圃をひろみ夕あかるしいつまでも白き梨の花かも

葉櫻雨

四月吉野山に遊ぶ、中千本のあたり已に葉櫻なり、翌日雨、同行二人

汽車のろく裾山ぞひを行くなべに手のどくところにも丹躑躅咲ける

たそがれの村ゆ河原におり立てばひろびろ明るし早瀬のたぎち

葉ざくら雨やみ間をぐらく静かなり塔の尾陵の石段を上る

淨らかにみさゝぎどころうちしめれり葉櫻雨のやみ間冷えつゝ

葉ざくらよ雨間の雫地をうてり花どき過ぎてかくはしづけき

これやこの雲井の櫻霧をふくみ五百枝の
花の冷えびえ白し

おく山はこのおそ春も冷ゆるなり殘れる
櫻に霧のつゆ凝る

よし野山青杉しみ立つ裏谷ゆ霧をむら濃
に吹く嵐かも

みよしのゝうら谷さむく霧しまき繁み立
つ杉の梢こぞり鳴る

向つ峰の牟杉むらを襲ふ雨風あし疾みた
たなはる見ゆ

み吉野の奥へこゝろざす岨さむみよこぎ
りあへず霧のしまきを

岨みちの蕨折りためゆきしかば手つめた
しも山のさ霧に

路のべゆ木深く飛びし山の鳥しばらくき
けど音もこそせね

葵祭の日

御所附近にて

行列を待つ人垣の前通る娘は羞ぢらひて
丹の頰てらへり

行列の通るま近み人ゆかぬ道路にじりじ
り朝の日たくる

馬も額に葵葉をつけられ居り

まなかひの葵うるさみ首ふれる祭の馬が
こぽこぽとほる

裝束に晝の日映えて祭人われ等の前をし
と〳〵と通る

御所車ひつぱる牛は質のよき例の眼して
うつとり邃れり

花傘をはこべる人は力み居りゆさ〳〵搖
れて花傘が來る

糺の森にて

ひろ前の神事のさなか垣外なる駒いなな
けり嚴かしきかも

楢の木の若葉柔かみ午すぎの日を透しつ
つしなえたるかも

温み風搖れざわめける高き枝に榎の木の
花の咲きにてあらずや

雲行きを見上ぐる森の木ぬれには花つけ
し枝のざわめきてをり

休みてゐる祭の列に午すぎの賀茂の長堤
風埃せり

この都にほへる花とさかえけむ代に逢へるごとき葵祭かも

六甲越

七月住吉の寓居より朝夕仰げる六甲山を有馬に越ゆ、
同行三人

山水の崖ゆおち來て道路きりすめるながれをまたぎてゆくも

みちのべの崖の細瀧おちきたる力に打たす我が掌を

朝暑くのぼる道けはし日でり空笹生の山の向うに立てり

日ざかりの高原ひろみところ〳〵草の葉かへり鶯きこゆ

雲通りとみにすゞしき高原にいやなきすます鶯きこゆ

岩が根の清水のみ足らひ羊齒の葉にしぶきをかけて猶しいこふも

峰の上笹生に通へる道筋のまぶしさ消えて雲のかげとほる

頂上の笹生が中に曝れくちて丸木の鳥居の立ちのさびしさ

頂上の白山權現の石祠照り下ろす日に小さくし見ゆる

峰の上笹生にくもる眞晝の日かな〳〵高
鳴く間近き谷に

うぐひすは鳴きすましをり頂上の笹原照
りつ曇りつするも

童

幼稚園にわが行きたるにをさな兒は汗あ
えにつゝ遊びてゐたり

足ぶみする子供の力寄り集りとゞろ〳〵
と廊下が鳴るも

子等の列わが傍を行くなべに子供のにほ
ひをさせにけらずや

幼稚園畫前にひけうなゐ等は課業の遊戯
了へてかへるも

學校の畫は闌けたれ本をよむ子供の聲の
しみらにきこゆ

大きな子供遊びて居たれ小さな子供歩む

わすれてほと〳〵見惚るゝ

着脹れて歩かされねし女の兒ぱたんと倒

れその儘泣くも

うなゐ兒のまろき柔手の指ゑくぼ觸れじ

とするも豈堪へめやも

雞

ふくらみて卵を抱けるめん雞の眼をみす
ゐて吾うたがへり

卵だきじつとふくらむめん雞のすゐゐる
眼の深きするどさ

卵抱き氣たかぶれりめん雞のこの本能の
いつくしきかも

めん雞の留守のとやにある卵をみて禽の
する事をかなしくおもふ

かへるもの凝りつゝあるらしとやの中に
卵がある様心をうつも

殖林の杉

山おほふ青牟杉のしみ立ちをながめてを
れば迫り來る如し

山おほふ青牟杉のしみ立ちのごとく
空をさしきほひたり

岨みちの左右よりすぐに殖林の杉みつし
り立てりこの厚みはや

殖林の杉ひしゝと左右より徑さしはさ
めり吾は通るも

殖林の杉の生ひ立ちのせまるみち一本通
るを歩みあゆむも

太秦の牛祭

歸りにば京へつれなし牛祭

太子前に電車を下りて太秦の夜寒をゆけば虫すだくなり

歩み入る太子堂境内をちこちに灯見えつ〻足もとのくらさ

境内の廣場のくらさ遠くの灯目あてに歩めば人もこそ行け

秋の夜の戸外をさむけみ着物重ね祭の人
出にまじる親しさ

人中にふとふり仰げば星ぞらにて秋の夜
祭安くたのしも

篝火は樹々の葉に映りこの夜らの人の心
をたのしくそゝる

寺庭の篝のあかりとゞきゆき夜目に青し
も高樹の枝葉

圓くなれる廣場の群集に篝映り今夜の神
事のいやまちがたき

牛祭の宵更けそめて地靄下りふところ手
する肌の小ぬくさ

この門より牛祭の列出づると聞きその門
に向きて待ちくたびれつ

人皆の丈よりぬきんで牛の上にて摩吒羅
神すぐるを豈見おとさめや

寺庭の篝のめぐり夜さむ靄あをみたる見
え祭もはてつ

人なつかしき夜寒にもあるか祭みるこ戸
外にて更けし着物つゆけく

雪晴れ

日の出前厚くつもれる雪に向き部屋の障
子の明かるしづもり

ひろびろと雪晴れわたり空あをしきらら
けきかもよ今朝の旭子

大雪のよべ降りしかば家人と朝餉に寄り
てしみらにしたし

枝々の雪おつる音あひつげりはやき旭に
むかへるこの森

熊笹の雪おとす音ひむがしに眞日の上り
のやゝに高かり

へだてなきもの云ひかはし街人等雪かき
をせり朝日の中に

午に近く雪どけざかりのあたゝかさ厨に
ものゝ煮ゆる匂ひす

雪どけの水すひ飽ける黒土の湯氣まもり
居り畫餉に坐り

春動く

冴えくもる淺山ぶみのほそきみち雪一し
きり笹に音すも

風の來ぬこの藏のかげ雪しづかにまひ下
りをり見のあたゝけさ

今日もくもる空に秀づる冬木の梢待たね
ばならぬ春の遠さよ

寒きながら晝は日ぬくむ田圃ゆき今更目
につくたんぽぽの萌え

春を淺み日かげればさむき雜木原小禽見
うしなひしが再び鳴かず

冬枯の櫻木ゆすぶる嵐雨硝子戸ゆ見る今
日なまあたゝかく

大き農家わら葺門外の白梅の道までにほ
ひてこの村しづか

空のいろ瑠璃になごめり白梅の咲きみて
る梢の枝間々々に

水たまり轍にのこり雨後の道しろくかわ
き春日まぶしさ

街道を埃立て行く荷車につゞきてあるけ
ば春日あつしも

春山一路

枸杞の芽の一夜の伸びをのびてゐる青芽
つやつや春の朝冷ゆ

木苺の下向く花に顔よせて嗅げばほのけ
き香に匂ひゐる

松にこもる風の音ありて山路のつまさき
上りいくまがりすも

春山の八幡宮は松風や日ねもすならしこの人氣なさ

鎌倉古跡

春日てる大御堂が谷に入りくれば麥畑の鶯殖林へとびぬ

歩き來て北條氏果てし巖穴のひやゝけきからに古おもほゆ

春山を汗ばみ上れり里わには青麥畑に風ひかる見ゆ

富士山へ上る

傾きて裾野に通る一本の道を自働車走る
も富士に眞向ひ

いちじるしく大きく見ゆる富士の下に自
働車を下り現し身ひくし

山を前に自働車を下り歩みおこす足裏幽
けく火山砂鳴る

自働車下り歩めば靜けし裾野原夏日澄み
やかに野ばら咲くあり

青草に夏日照り澄みひろ〳〵と裾野傾け
りそのかたむきを

裾野木原葉のかさなりを深く徹る日にを
ちこちの草光あり

太郎坊に霧を颯すも晝すぎしこの大き山
へ敢へてし上る

地をこめてたゞよひ動く霧の脚麓の傾斜
の熔岩濡らす

大霧のしゞまの中をぬれくろむ火山砂踏
みのぼりつゞけ居り

富士の麓大霧中のしゞまにし現し身深し
笠しづくすも

目の前にて大霧俄かにとぎれたるにま近
くなりゐつ富士の頂き

面むけて上りつゞけゐし富士山よりふり
かへり見る裾野のひろがり

山腹に立ち見はるかす傾斜の線夕空なゝ
めに切りてし曳けり

今日とまる七合目の小屋山腹の高きところ
ろにて旗ひるがへせり

小屋の中ランプの前にところ狭くわれ等
人間夜明けを待つも

岩室の夜冷えて來つたづさへし毛布かつぎて山畏れ寢ぬ

晝の疲れいでしものから寢つかれぬ岩室の床の夜ふけて冷ゆる

岩室出て尿をしたり今宵のわれしみ〴〵いとしも寒さにふるへて

東京横濱空明りするをのぞみゐれば身慓ひつくもお山の夜冷え

都會の空ほの明りせりお山に寢る今宵の
われのかすかにもいとしき

岩室出でて空の眞闇にそゝりたてるお山
しばし見て灯の下にかへる

岩室の夜更けしづみ地より冷え稻光うつ
る硝子戸口に

岩室は大地より冷え室人の更けて寢ぬ聲
さゐさゐきこゆ

地球はめぐりけらしも起きて見れば澄み
つかれたる星々の光

眞夜すぎて幾時もあらぬ起きて見ればこ
の山へ向けて白みきざせり

七合目の夜明けの寒さ寝の足らぬ眼をし
ばたたき草鞋をはくも

一夜ねし曉の灯の下を出でぬ白みつゝあ
るお山のさむさ

白みそめし山の石ころみち睡の足らぬ眼
にみすゑて上りに上る

山を脊にむき直る前は雲の大海しづみ白
めりこのたよりなさ

日の出前の紅み眞に受け富士山の東傾れ
は染まりたるかも

急になれる山に面むかひ足もとに力をい
れて岩ふみのぼる

山へとぐく朝日のいろの黄いろきに虎杖
の葉のいや綠なり

富士山の大き傾き遂に上り石ころの地に
ころぶしにけり

眼をはなつこの大傾れを二日かゝり攀ぢ
きとおもひ足をやすまず

眼をはなつこの大傾きをこつ〳〵と攀ぢ
つめしかもよ頂上にあり

富士山の頂上なれば登山者どち人間同志
のよしみを感ず

頂上に庵する人は岩積みて暗きが中に晝
もこもれり

太陽は眞上に來り眼の前に富士の頂上を
明かに照らす

頂上の石塊しきて下に居れば午の日眞に
照り我れ山に醉ふ

甲斐の側に白きは雲と見し間もなくはび
こりもり上るこの量は如何に

山に醉へる眼をひき入れて我れの前に奈
落へ低まる傾れのひろがり

大傾れたよるものなきに足ふみ入れ山醉
頭痛堪へたへ下る

太郎坊も通りすぎけり裾野原この日も夕
づき何かわびしも

夕日洩るゝ裾野木原に下りきたりくたび
れあゆむ平たきみちを

御殿場へいそがす馬車のごゞろきに身を
まかせつゝ富士顧す

御殿場より夕不二のぞむ上り來し今日の
お山かいつくしきかも

岬

蒼潮へつたはりきたる波のうねりふくら
みの腹崖の根をうつ

崖の根へ波のうねりのふくらみのたつぷ
りあたり音彈みあり

しわみしわむ波のおもてへおのづから深
みに徹るうねりぞきたる

頭上の日かゞやける海草短かき岬の端に
われ一人なる

崖下海午后かげりきて搖れみだれ巖根う
つ音間なくしさやぐ

午后になり岬のかげの日かげ海搖れのみ
だれの藍さむみ見ゆ

觀音堂

堂あゆむわが下駄の音止まればやみ内陣
のしじまへ瞳を凝らす

内陣のくらきしゞまの奥處にして厨子の
扉の左右ゆ閉ぢたり

堂のうらは建物かげのしめり冷え下りし
づみゐる苔生花もち

堂の後日あたることなく本尊のそびら間
ぢかみ寒さに淨めり

櫻おち葉幹のめぐりの黒土の濕りの上に
ひぞりてゐるも

大和の田舍

冬丘

一むら雲日をかげしたり土白き往還のい
ろ目にくらくなりつ

うすら冷たき夕日のいろかも野を歸るか
ら車の鳴り空氣にむじき

冬丘のゆるき斜面の桃畑交れる枝みなあ
かみをもてり

冬丘の桃畑ぬけるに肩に押すあかみもつ
枝はねかへりなほる

小泉村慈光院

二三里の冬田越しに見ゆ枯芝に夕陽のあ
たるわかくさ山が

目路さむき冬田向うの山もとに夕陽を浴びたる大佛殿の屋根

奈良山の夕陽見てをり目路ひろき冬田にのぞみてこの丘のさむさ

寺に泊り風呂に入り居り外は畑霜にいたむ菊のたばねたる見ゆ

この寺にとまることにしてくつろげば大和の田舍の夕ぐれしづかさ

寺庭の夕靜あゆみさむけきに目にとめて
見つ白き山茶花

しづかにてくらくなりきつ顔つめたく寺
庭歩くに山茶花の白き

大和路の冬の村にきてとまる夜のこのし
づかさのしづかすぎたる

大和國法起寺

小泉村に泊りし翌日、時雨の中を法起寺三重塔を見に行く、塔は飛鳥時代の建築なり

埴岡を時雨にいゆく道のべにくれなゐき
はまるぬるでの紅葉

近づきてつくづくあふぐ千年經て今日の
時雨にぬれゐる塔を

時雨空に見上ぐる塔の層々の甍のぬれの
色のさむけさ

時雨降る音耳にありしみ〳〵とおもひを
致す遠いにしへに

岡もとの白埴きよみ千年經し三重の塔の
立ちのさやけさ

岡本の白埴淨しこの此處にいにしへ人の
寺いとなみし

塔の下かわけるたゝきわが傘の雫の跡を
印しけるかも

前に堂横に塔あり埴白き境内われ等を容れてしづもる

堂塔に時雨の雨の降りにふり夕ちかみくる今日のわびしさ

一四六

法隆寺村は埴土しろみ夕時雨驛まで遠し田圃の暇

一四七

晩秋

夕陽

秋の西日田圃に照てれり郊外電車足穂の上に影を走らす

掛茶屋の秋の眞西日菊つくる脊戸へぬけて見れば土のつめたさ

洛西桂離宮

泉水に公孫樹の黄葉うつりをりひろらのお庭の夕靜をめぐる

落葉掃く箒の音は何邊かも築山紅葉の夕
冷えの光澤

築山裏淡紅いろ山茶花咲きてをり靜けさ
まとまるこのひとくまに

一五〇

京都衣笠村

西空の雲に日かくれつ寺の池冬木うつり
て水凝りすめり

西山の上日をかくしゐる雲うごかず夕方
空氣のつべたさするど

一五一

夕かたまけ水こりすめる寺の池紅葉のこ
れる冬木うつれり

夕闇の妙心寺境内ゆくに大建物くろ〻
われにのしかゝりゐる

日没後時經てくらき中空に山門の屋根の
反り猶見えをり

大根畑

冬空は磨ぎすまされてあり大根畑さ緑さえて遙に對す

武藏野の黑く柔かき畑土かた太大根葉の下にうづまる

澄みくろみ冬川眞水の流るゝに男洗ひおとす大根の土を

小流れの澄める淀みに近々と物洗ひ場は
ひくゝなりゐる

かた太の練馬大根ひたさるゝ野川の水は
よどめりくろく

濡れ白き大根の光澤にさし弱る冬の夕陽
の匂ひやかなり

夕野かへる百姓の引く力車くきやかに積
めり濡れ大根を

冬空の西夕焼けてくきやかに富士連山を
磨ぎ出しにけり

冬空の西夕焼すつゞきわたる大根畑のさ
緑明りて

西空の夕焼けに立つ冬木の枝繁に黑しも
大地すでに凍て

冬日

旭たかみやゝにあまねき暖かさみちわる
凍土つぶやきとくる

畑みち霜解けの水氣土にしみ眞晝の冬日
のまともにはあつき

おきわたす今朝の大霜日を浴びて野山の
光いときらびやか

冬山はぬくとくもあるか裸木のしゞに枝
くむ下は日だまり

楢の木の枯葉ふれあふ音すなり冬山日な
たは人のぼせしむ

夕寒の空氣頰をさす葉をふるへる桐畑の
向うの空あかくやけて

風すさぶ外の面をきけば冬木の枝しなふ
うなりの徹りてきこゆ

春

雨後

寒あけの雨後おもきくもり空大地の凍て
はあまねくとけつ

雨あとの空みづ〳〵し近く見ゆる山の上
の松色古びたる

この頃にて長くなりたる夕日あたりあか
くしめらひ見のしづけさや

冬丘の萱生地肌の雨じめり夕日長きに踏
みのぼり見つ

春暖

せゝらぎのこぼ〳〵こもる落窪をたわみ
おほへる木いちごの花

嫩芽ふく春山林しづけさをば立ちどまり
きゝ立ちどまりきく

くろ雲

片空へよどむ黒雲に夕日さしおどろおど
ろしも春の眞盛り

片空へよどむ黒雲下びにて正面の夕日に
遠光る李花

牡丹と芥子

牡丹花は咲き定まりて静かなり花の占め
たる位置のたしかさ

花びらの匂ひ映りあひくれなゐの牡丹の
奥のかゞよひの濃さ

この室のしづもりみだるものもなく床の
牡丹のほしいまゝに紅き

花になり紅澄める鉢の牡丹しんとしてを
り時ゆくまゝに

床の間のをぐらきに置く鉢の牡丹白牡丹
花は底びかりせり

花びらをひろげて大き牡丹花に降り出での
雨のぢかにぞあたる

牡丹花の大き花びら萼はなれ低木の下の
地に移りたる

低き木の大き牡丹花なくなりてその根の
土に花びらぞある

芥子

のびきれる芥子の太莖たゞ一つのこの眞
白花を今日ひらきたり

芥子の莟花になり了へ花びらに莟のとき
の皺のこしゐる

芥子の莟咲きてあらはれし眞白の花びら
の皺の光りかげりはも

雨後新樹

夜あがりの瑠璃蒼空を走る雲かろやかに
してこゝだはしるも

雨あがりの天氣とみにあつし若葉山いち
はやく出て松蟬がなけり

日なた來ていこへばけだるし耳につき松
蟬じり〳〵鳴く山の下

ゆきめぐる檜若葉山下草に洩れ日ちちら
ら搖れさだまらぬ

日かげれば若葉はくもりこの見ゆる景色
の氣持とみにしかはりつ

深夜汽笛

眞夜中にひとり目覺めてそのまゝゐるわれに響きとゞく遠方の汽笛

眞夜中のこの夜の更けに鳴る汽笛しばらくとよみて鳴り了ひたり

眞夜中に遠方の人の鳴らす汽笛たま〳〵覺めてわがきくものか

峡のみち

柿紅葉枝はなるゝありおし默り一人歩め
る峡の畑に

この峡にわれ一人なり近くにてほそ〳〵
澄めるせゝらぎの音

ふり出でて笹にあたる雨の幽けきに耳す
まし歩みわが行く山路

夜道

夜さむ道向うにきこえそめしせゝらぎに
歩みは近より音のところを通る

せゝらぎの音するところに來かゝりしが
また遠退きてわが夜道すも

冬來る

背戸畑の白菊の花紅みさしあはれことし
の秋もいぬめり

雜木林の黄朽葉ぬらすしぐれの雨しづか
に降りて音の冷たさ

森の木の幹立深くうづめつゝ日溫みたも
つ今年の落葉

今年の葉うづたかく散りこの森のどの木の幹にも冬日ぞあたる

このまゝに眞冬をとほす常磐木の葉は青ぐろくぢゝむさくあるも

雜木山裸木の枝もつれあひ日を受けてをり冬山これは

春光

榧の木と接骨木並べり春さりてにはとこ
芽ぐみ榧ぢゝむさき

一八八

地の上にてわが手ふれゐるこの欅は高み
の梢へ芽ぶきつゝあり

一八九

庭の面のむらさきつゝじ晩春の夕冷え時
を艶やかに冴ゆ

遊びつかれ夕日流らふる椽臺にてさくら
餅を食めば何かさびしも

思ひ出

草にゐてわりごひらけば眞上より野天の
春日握飯を照らす

草にぬて友と辨當つかひをればこの友の
ことがいや親しもよ

泊る町へ春日夕づき未だつかずだまりこ
くりて歩く久しさ

とく寢ねばや夕方宿よりあふぎつる彼の
高山を明日は越えんに

今日通りし村里野山眼とづればうかび來
るかもよ身はつかれ寢て

新緑

若葉樹の繁り張る枝のやはらかに風ふく
みもち搖れの豐けさ

若葉枝のしみゝの奥にかもされゐるこの
明るみよ濃やかと云はむ
向山の雜木の若葉風とほり搖れいちじる
く夏さりにけり

晝の雨はれんとすなり雲にふくむ眞日の
光に若葉の明るさ

向山の濡るゝ若葉に雨空の明るみ映り晝
はふかしも

嵐いま迫りつゝあり向山は樹々大搖れに
なり音たゞならぬ

初秋

雨やみてとみに秋づけり村ゆくに物あら
ふ流澄み透りたる

雨あとの秋づきしるしいとゞしく心よる
もよ土に草木に

晩秋初冬

菊

白菊は花びらの光澤おのづからかゞやか
にして園に臨めり

朝つゆのつめたき庭に下りたちて菊の花
剪れば香のきよみかも

陶壺に黄菊白菊挿したれば花々寄りそひ
黄のそばに白

冬意

雨傘をひらけば音あり冬めきし時雨の中に朝戸出するも

十一月

からびたる木の葉のそよぎきこゆなり十一月に入り日ざしきらゝか

木々わたる風の音からびなく鳥の聲するどくしてすでに冬なり

十一月の日かげさむけき午后の風さやさやあひつぐ笹の葉の鳴り

向丘の櫟の木の葉日々に黄ばみ鋭き蒼空
とかけはなれ見ゆ

夕寒

日沈みて藍くすみたる夕べ空底なき寒さ
をたゝへたるかも

日の暮のきびしき寒さやゝにゆるび空つ
ゆじめる月夜になりつ

これはこれ櫟の立木枝わかれ細かき梢の
冬空させる

鎌倉の家

この谷戸の紅葉をぬらす夕時雨移り住ひて冬四たびなり

大霜

道ばたの枯かや草におく霜の旭をはじき光るきらきら

日の出頃街道の霜眞白にからからつゞく
百姓の車

街道の霜に跡つけきびきびしく百姓車が
町に出て行く

汽車に寢て三河あたりか大霜に早出の百
姓道ゆくが見ゆ

軍艦碇泊

胴體を波に深くしづめ軍艦の取りつくし
まもなく横たはりゐる

軍艦の八幡ゆるがぬ胴なかをさゞなみう
てり灣のしづけさ

近頃は四海波靜かなれば軍艦もこの浦に
來てどんたくをせり

集の末に

こゝに輯めたのは、大正七年から十二年迄の作で、配列は略製作順。但旅行の歌は製作の年月に據らず、旅行の年月に據つた。

洛北大原行(大正四年)出雲にて(大正五年)日向へ(大正六年)等は、當時の控や、記憶によつて後に詠んだものである。

この集を編むに當り、序文を書いて下さつたのみならず、種々配慮を賜つた佐佐木信綱先生、美しい裝幀を以て此の本を飾つてくれた岸田劉生兄、原稿の淨書その他の

面倒を見てくれた石榑茂君に厚い謝意を捧げます。

大正十三年十月廿五日

鎌倉名越にて

利　玄

木下利玄歌集

銀（絶版）	短歌二百九十九首 大正三年三月版 東京麹町區平河町洛陽堂發行
紅玉（絶版）	短歌五百十六首 大正八年七月版 東京芝公園玄文社發行
一路（新刊）	短歌三百五十八首 大正十三年十一月版 東京本郷區西片町竹柏會發行

大正十三年十二月二十三日印刷
大正十三年十二月二十五日發行　〔定價二圓〕

著者　木下利玄

印刷者　東京市京橋區宗十郎町十五番地　阿部節治

印刷所　東京市京橋區宗十郎町十五番地　東京國文社

的々紫

虎

合雨情

一四三

某

合長寿